

近代常滑における陶彫の系譜

西洋の彫刻技術の導入

工部美術学校 [1876－1883]

日本で最初に設置された官立の美術学校。イタリアから美術教師を招聘し、西洋の美術教育を行った。彫刻学科では、ヴィンチェンツォ・ラデーザの指導のもと西洋の彫刻技術を学んだが、これは従来の徒弟教育から学校教育への大転換でもあった。

当時の日本では彫刻という概念がほぼなく、彫り物は職人の仕事とみなされた。そのため、彫刻教育やその道での就職は困難を極めた。これは、工部美術学校の画学志望者は多いのに、彫刻学志望者はほとんどおらず、結果、彫刻学が官費生になったことからもうかがい知ることができる。

後に設置された東京美術学校が日本の美術界の中心となっていく一方で、工部美術学校で西洋彫刻を学んだ卒業生は、活躍の場が得られなく、他分野で活躍する者がほとんどだった。彫刻学科の主な卒業生には、彫刻家として活動できた大熊氏 廣 (1856-1934)、藤 田 文 蔵 (1861-1934)、建築装飾で活躍した佐野昭 (1865-1955)、陶彫の基礎を築いた寺内半月、期待されながら若くして亡くなった内藤鶴嶺、石膏像販売事業で成功した菊地鍬太郎 らがいる。

日本らしい美術の模索

東京美術学校 [1889－]

(のちの東京藝術大学美術学部)

彫刻科では、高村光雲や竹内久一といった伝統的な木彫や象牙彫刻の流れを組む職人的背景を持つ彫刻家を中心に教育が行われた。

本格的な西洋彫刻の教育は開校から9年後の1898年以降まで待たねばならなかった。工部美術学校と東京美術学校における西洋彫刻の流れが結びついて以降も、東京美術学校の系譜を継ぐ者が彫刻界の中心的役割を担うことに変わりはなかった。陶彫においても同様で、竹内に師事し、鍬金科の岡崎雪声に学んだ沼田一雅 (1873-1954) が恵まれた環境の中で陶彫の制作に励み、その技法を広めた。

〈主要参考文献〉
愛知県陶磁美術館学芸課『常滑：古常滑・急須・陶彫』

金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』

柴山寛『柴山清風展 ―没後50年・陶彫にみる清風のこころ』

竹内久代『常滑陶器学校の歴史』

田中修二『最初の彫刻家たち』『近代日本彫刻集成 一卷』P107-112

常滑市教育委員会「常滑陶彫の源流～その歴史を築いた人々～」

西村佳菜子『日本近代における『陶彫』の創始者についての一考察 ―寺内信一と沼田一雅の比較を通して―』

半田市立博物館『陶彫―常滑陶彫の歴史』

吉田朝子『工部美術学校と洋風彫刻』『近代日本彫刻集成 一卷』P133-136

鯉江方寿

(伊三郎, 1821－1901)

常滑の大窯元に生まれ、父の方教とともに江戸時代後期には真焼窯を完成させ、土管製造とその大量生産を可能にした窯業実業家。家業の傍ら、肖像類の作品を残したが、それらは西洋彫刻の技術と出会う前の、江戸時代末期の常滑焼の特徴が見てとれる。他方で、経営や制作だけではなく教育活動にも力を入れた。窯場に常滑美術研究所を開設し、内藤鶴嶺や寺内半月を招聘するなど鯉江の活動がのちに常滑で陶彫が生まれるきっかけを作った。

開設

常滑美術研究所 [1883－1888]

鯉江の資金や場所提供の元、常滑の窯業家有志により運営された製陶や彫刻の研究所。工部省大技師宇都宮三郎が、常滑の土がテラコッタ制作に適していることに気づいたことから、窯業の近代化のために研究所の設置が発案されたという。工部美術学校出身の内藤鶴嶺、菊地鍬太郎、寺内半月が教師を歴任し西洋の彫刻技術を伝統的な常滑の製陶技術と合わせ、陶彫作品が生まれることとなった。

教師 1883-1885

内藤鶴嶺

(陽三, 1860－1889)

父は金石学者白野夏雲。工部美術学校彫刻学最初の卒業生で、卒業後は皇居造営に関わるが、建築方針の見直しから退職を迫られ、その後常滑美術研究所に赴任し生徒を指導し、常滑の陶土を用いた彫塑技術を模索した。また石膏型の技法などを伝授したが、1885年に退職。ドイツのベルリンに留学するも30歳の若さで亡くなった。寺内とは強い友情で結ばれていた。

後任

教師 1885

菊地鍬太郎

(1859－1944)

工部美術学校彫刻学の最初の卒業生で、内藤鶴嶺らとともに皇居造営に関わるも建築方針転換により退職。常滑美術研究所を退職した内藤の後任として指導にあたるが2ヶ月足らずで退職。その後、石膏像素描教育の隆盛と共に、東京で石膏標本の製造販売に力を注いだことで知られる。

後任

教師 1886-1888

寺内半月

(信一, 1863－1945)

工部美術学校では官費制の彫刻学に進学。内藤鶴嶺らと同じく最初の卒業生で、皇居造営に関わるも、建築方針の見直しから退職を余儀なくされる。常滑で陶器製造を営む鯉江家に技師として雇われ、製陶に彫塑技術を持ち込む研究と指導に取り組んだ後、内藤、菊地らの後を継いで常滑美術研究所にて教鞭をとる。研究所閉鎖以降は瀬戸や有田などで指導にあたった。積極的に西洋彫刻の技法を取り入れた寺内の功績は大きく、窯業の近代化に貢献した。

教師助手

浦川一斎

(竹二郎, 1856－1909)

常滑の伝統的な系譜の製陶家。

2代松下三光に学び、常滑美術研究所にて陶製品の製作なども行った。

教師助手

富本梅月

(幸吉, 1861－1939)

浦川から指製陶法を学んだが、陶彫に関しては無学であったとされる。

教師 1896-1932

平野震裳 (六郎, 1873-1938)

常滑美術研究所にて内藤と寺内の指導を受けた。1896年、後の常滑陶器学校の前身となる常滑工業補習学校に教師として赴任。1903年には東京高等工業学校窯業学科に入学して製陶の学理を学び、一時期教職を離れたが、帰郷すると再び教鞭をとった。製陶技術と陶彫を常滑に広めるとともに、水上水玉、柴山清風、片岡陶楽など多くの後進を育成した。

常滑陶器学校 [1896－]

(現・愛知県立常滑高等学校へ)

常滑工業補習学校として開校したのち、学校制度の変更から常滑陶器学校へと改称。その後、町から県立へと移管した。幾度の名称変更や、戦後の合併などを経て、現・愛知県立常滑高等学校へ至る。

内藤と寺内の指導を受けた平野が指導にあたり、その後任は東京美術学校彫塑科で朝倉文夫に学んだ坂田芳信 (1907-1961) が教鞭をとった。陶磁器の輸出業で成功を収めた初代杉江滄軒 (1881-1963) や、水上水玉、柴山清風、片岡陶楽など、多くの陶彫家を輩出した。

後任

教師 1932就任

坂田芳信

(1907－1961)

東京美術学校彫塑科で朝倉文夫に学んだ坂田が平野の後任として教鞭をとった。1951年に発足した常滑陶彫会の初代会長。

柴山清風

(廉三, 1901－1969)

常滑陶器学校で平野に学んだ。卒業後は同校の助手をつとめ、後に原型師として独立。戦争へと向かう中で観音像を作りはじめ、生涯にわたって陶彫の仏像を作り続けた。高さ2mを超える大物陶彫の仏像制作にも取り組んだ。

片岡陶楽

(武正, 1901－1964)

水上水玉の弟子として一時期働いた後、常滑陶器学校で平野震裳の指導を受けた。清風のライバルとして知られる。常滑市の神明社の陶製狛犬は清風作と陶楽作からなり、それぞれの作品で一對となっている。

水上水玉

(文吾, 1884－1957)

常滑工業補習学校で平野の指導を受けた。常滑において陶製の人形・玩具を本格的に制作したことで知られる。晩年は陶彫の置物を中心に制作した。

近代常滑の製陶

さあ、「陶の仏」展を見たら、 日本橋高島屋の屋上へ、 そして高島屋史料館（大阪）の 「万博と仏教」展へ（～12月25日まで）！

当館では現在「陶の仏―近代常滑の陶彫」展を開催しておりますが、同じく当館の企画・主催、君島彩子監修にて、高島屋史料館（大阪）では「万博と仏教―オリエンタリズムか、それとも祈りか？」展（～12月25日まで）を開催しています。また、この2つの展示の連動企画として、日本橋高島屋の屋上には、常滑造形集団が制作し、実際に1970年の大阪万博に出展された椅子《陶製ベンチ（月の椅子）》（とこなめ陶の森資料館所蔵）22点を展示しています。重いものでは1点100キロ以上もあるこ

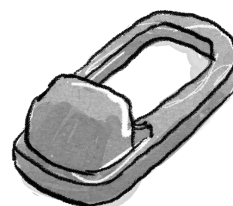
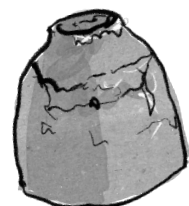
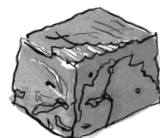
のシリーズ作品は、その運搬の困難さから、東京でこれほどまとまって鑑賞が可能になるのは初めてのことです。寺田英史（tamari architect）・中山 智憲（園園）による作庭で、村野藤吾が設計した屋上の象の塔屋前に、楽しく気持ち良い空間が広がっています。決して座り心地は良くないのですが、ぜひ、実際に椅子に腰かけながら展示の感想などを語っていただくとともに、あふれんばかりの熱量により制作された《月の椅子》から、常滑の造形パワーを感じていただければ幸いです。

陶の仏 ―近代常滑の陶彫

会場：高島屋史料館TOKYO 4階展示室
（東京都中央区日本橋2-4-1 日本橋高島屋S.C. 本館4階）
会期：2023年9月16日（土）
～2024年2月25日（日）
休館日：月・火曜日
（祝日の場合は開館，年末年始12月30日～年1月2日）
開館時間：午前10時30分～午後7時30分
入館料：無料

主催：高島屋史料館TOKYO
監修：君島彩子（宗教学者，和光大学講師）
協力：小栗康寛（とこなめ陶の森資料館）
展示デザイン：伊東鷹介（スタジオキノコ）
グラフィックデザイン：泉美菜子（PINHOLE）
担当学芸員：海老名熱実

イラスト：座二郎



万博と仏教

東海道新幹線



高島屋史料館
TOKYO